

2017.9.1

現代俳句千葉

126号

巻頭エッセイ

戦争と平和

監査役 吉野 精



昭和十九年十二月一日、静岡県三万原にあった陸軍第八教育隊というところに入隊、二週間後、現在の中華人民共和国の山東省済南というところにあつた部隊に配属された。

ここで約一か月の教育を受け、そののち黄砂の発生地に近い山西省大同というところに駐屯している隼九一四部隊という飛行隊に配属された。飛行隊といつても飛行機など一機もなく、中国共産軍の襲撃に対応する毎日であつた。

何故このようなところに配属されたのか理解に苦しんでいた。軍隊に入隊前は北辰電機製作所というところで特殊潜航艇という小型の潜水艦の羅針盤の組立て作業に従事していた。このような者をわざわざモンゴルに近いところに配属した当時の帝国陸軍上層部の考え方が理解できない。

戦争とは人間の考え方を狂わせてしまう誠に恐ろしいものである。その後部隊は遼寧省の大連その他点々と移動し熊岳城と言うところで戦争の終結となった。

昭和二十年八月十五日中国の子供たちから石を投げられたことを今も鮮明に記憶している。ただその地に日本人が栽培していた林檎園があり青い林檎がたわわに実つていた。

太平洋戦争終了後七十年有余、日本は憲法九条のもと平和が続いたがこの先は分からない。永久に平和であることを祈る。

明日の命黄砂まざりし飯を食う

戦争に負けたあの日の青林檎

九条は世界の遺産菊句う

大根を作れ銃弾造らずに

精

目次

戦争と平和 吉野 精	1
諸家近詠	2～4
私の感銘句	5～8
津田沼研究句会報告	9
青葉研究句会報告	9～10
柏研究句会報告	10
図書紹介 ひろば	11
会員・会友の近況	12
掲示板	12

千葉県現代俳句協会会報

諸家近詠

半田 千枝

湯婆のさめきつて胸に独り居なり
ひび割れた大火鉢声が聞こえる
読初めは太宰に決めて眼鏡拭く
猫柳辛いパスタと喧騒と
街に灯がともる時までチューリップ

沼山美津江

吹越てふ駅あり北へ秋の旅
盲導犬二人に控ふイヴの卓
ツキ・ヒ・ホシ三光神社小雪降る
愛犬に小言いひては春休み
ものがたり読むも途絶えて春深む

中山 皓雪

初空の落款として梅一輪
歩巾異なる春愁の湖畔かな
甚平を抱く甚平ピザハウス
脱北の雀もをりぬ案山子翁
冬夕焼灰になるまで歩きたし

松澤 龍一

たまゆらの裏原宿に父母祖父母
鴨居に遊ぶ曾祖父祖父似祖父似
生きる生きる 三月十二日の朝
夕日墮つ終戦の日の特攻機
眠剤の夢 伽耶琴の連打され

藤井 稜雨

墓およそ小さきで足る柿落葉
寄席はねてしづる町の碁盤路地
一子二子三子束ねて七五三
大安の三隣亡や帰り花
翔ちてすぐ休みがちな夕千鳥

村田黙己春

弔ひの終はりてひとり花の雨
火の山を隠す梅雨雲みこしぐさ
冴え返るICUの非常灯
春灯の点かざる家となりしかな
冥土への引越準備涅槃西風

森村 文子

うまごやし冠にも紐にもなれる
孔雀花ねむ少しだけ深入りす
悠久の巨木すなわち新樹かな
天上薔薇園知っている人ばかり
望遠鏡のぞけば少年の六月

三苦 知夫

自己主張強くて孤独白つばき
落雲雀散華のごとし震災忌
雑音の中に昭和史ひばり落つ
落雲雀くすぶり続く退位論
基地にへり建国記念日波高し

実昶 繁

切れと間の美のありにけり遠花火
白虎とや南部風鈴なる音色
山彦の手応え青嶺ぐんと寄る
世に条理不条理のあり実梅落つ
四葩咲く杓子定規な人の居て

水野 禮子

多喜二の忌石ころ土くれ白い朝
樹下立夏弟が叱られている
会いにゆくためのロケット終戦忌
葡萄一房山国の空分かつ
どの橋も未知の入口冬銀河

森 孝子

沈丁花闇の狭庭を広くする
海よりの風を商う風鈴屋
逆さまに雑誌見てる子百日紅
虫干しや締める当なき博多帯
夕虹の消えてふる里遠くなり

増田 豊子

女の子としやがんで土筆採つてゐる
春宵の蟹蟹歩きバイキング
永き日のつぎつぎ開くパラシユート
コーラスのやさしき春の二十曲
啓蟄のガレージ閉ぢし余韻かな

馬淵 津枝

遠足の二列最後まで二列
一語また一語おぼろへ解けてゆく
春大根新妻という忘れもの
水中花夢と思えぬ死の夢よ
缶詰めを空けるぶるつとくる八月

松澤 伸佳

小春日の鼻唄君は綺麗になる
岩燕ちっちゃな駅は止まらない
紙皿のアイスクリーム病んでいる
キリストはほめ上手なりクモの糸
右手はあなた左手は秋日傘

松本 千花

新緑や右のズックにみぎの文字
よく育つ三年二組のヒヤシンス
外づらはばわんと春の要石
浅春のその嘘ほんと？爪を切る
また墓に絡んだ話春炬燵

元橋 孝之

紫木蓮一步さるたび後ろ髪
ご破算で願ひましては山笑ふ
春潮の遠く鋸山の肌
海青く崖より直ぐに曼珠沙華
移ろひの区切りをみたり枯木立

細野 一敏

六月の無礼赦せよ頤の髭
缶切りを忘れ万緑に叱られる
七夕やかなうものならびんころしやん
北に行く夜汽車の音や星祭
西日濃し缶をこきりと角打屋

安田 時空

ニコライ堂ロシアの子等も七五三
薬や死角に潜む決意あり
春愁に餌を与えて飼っている
中央に城戴いて麦の秋
一閃や海に雷神仁王立ち

前島きんや

図書室の机にひとりづつ昼寝
鬱の文字天眼鏡に紙魚歩く
黒縁の眼鏡十年星涼し
酔ひ醒の水一杯よちち虫
打水や行つたり来たりの三輪車

深山きんぎょ

海へ向く足跡ひとつ花苺
あぢさゐの重なる毬の明るさよ
黒南風や新仲見世に買ふ束子
対局の眈しづか男梅雨
まだ固き扇あふげば固き風

藤井 遥

わが語彙の片寄つてゐし鯛雲
道化師の涙がかわく空つ風
爛熱うせよ母恋ひのをとこ唄
夏草の挨拶ならん脛に傷
苦瓜のあれは怒りの極彩色

福田志津子

花吹雪今日の命の吹き溜る
頃合をぶつぶつ急かす榮螺かな
喧騒をひと呑みにして滝しづき
房総の鳶の雛揉み青嵐
大花火流れて月の残さるる

保坂 末子

百様の祈りの絵馬となりて梅
干されれば笑うしかない目刺かな
籍ぬけば抜いたで騒ぐ竹の秋
夏ですぬ眉間を走る水の音
父の木も兄の木もあり蟬時雨

村上千代美

出会いと別れハンカチの花の思惟
観覧車空に放つた夏時間
踏み出すか雲の峰まで乗車券
万緑に紛れてからは第三者
新涼の心にコロン駅に立つ

柳沢 純

進退は男の器量冬の賜
嬰兒の命の匂ひ風薫る
思い出をまた捨ててゐる更衣
老いてこそ大志に生きる雲の峰
どこまでも歩きたくなる芒原

矢野 忠男

べか舟のゆれを試して夏に入る
初紅葉日矢を集めて馬隠
ひとし逝く葺爛酒置いてゆく
午后からは無人改札賜日和
昭和の日昭和をけずる乾物屋

藤岡 尚子

白抜きの茶の一字や京の春
夏の恋浮棧橋を踏んでみる
月耿々浮き立つ路地を畏れをり
谷分かつ日陰日溜り石露の花
白障子辞儀は静かな刻を生む

政成 一行

研ぎすぎて諸刃するどき利器の怪
内部被曝 ここまで生きる草の息
死ぬること知るは直前 風のこえ
炎昼に木屑か蚯蚓か ころがつて
そういうえば未明殺意のへり機来た

藤田 富江

春が生まれ春が歩いてくる廊下
どこをどうして春泥の道ばかり
過去がいつぱい短夜の静寂
追えば去る影絵の中のちゃんちゃんこ
風花や夜は神様降りてくる

望月 彩

夏草が主顔して無人駅
百年を磨くも過疎や齒染若葉
飽食の厨に盛らる夏野菜
山門の阿呬を悟る桜道
呑み込めぬ一言残る早星

諸家近詠

三好美穂子

追い掛ける背中見えなくなる二月
折れそうな翼を抱え万緑へ
今ならば笑って済ます夏の霧
今生の余熱で挑む寒詣で
落葉踏む残り時間は気に掛けず

星野 一恵

夏蝶となつて木の橋渡りけり
水槽のらんちゅう泳ぎだす青空
薔薇いまだ水の音のみたかぶれり
羽抜鶏初めの一步踏みだせず
夏蝶追う男はいつも半ズボン

松崎あきら

WOWWOWWOW不信なのだと呼ぶ夏
たんぼ絮毛時間通りのバスが来る
白日に猫の骸ついに涼し
夏の肉叢ぬらり轆轤は回る
溽暑脱ぎ捨つロッククライム

松岡 節子

生れし児の手の襷深し梅匂ふ
乳房挟む板の無機質盆の来る
長月の珈琲身内漂白す
一番に足出す蝌蚪よおとうとよ
牡丹や推敲の文字荒荒し

宮本美津江

定型といふ木の百年先の春
定型といふ底なしの金魚鉢
定型といふ言霊は巢立鳥
定型といふ竜淵に潜ませて
定型といふ枯草は鋭利な刃

山口 夕紀

トンネルを過ぎて故郷の深緑
転倒のわが身を啼くや鴉の子
才能を急死がとざす青嵐
誰か死にたれか生まれる春の星
彼の世へもゆつくり進むかたつむり

柳本 ゆみ

陽炎や象の花子と戯れる
方言の頭上にほぐれ花水木
青嵐女兵士の腰に銃
雨蛙青いセダンに乗り込みぬ
片蔭の長い行列大聖堂

松本 静顕

休耕田荒るるにまかせ成人祭
年金の減りゆく列島さくら冷え
良き昭和たとへば母の豆御飯
糸瓜咲く明治の雲を呼びたくて
遺骨なき墓に無念の曼珠沙華

村上 澄子

ふくらはぎ揉んでこの世の夏に入る
春雷やタツのおとし子浅草に
濡れているお岩稲荷や半夏生
陽炎や晩学という鹽船
さみだれや己が身巾の猫のひげ

藤田 守啓

人形の手が伸び拾う落し文
卯の花腐し罪はかならず暴かれる
浄玻璃に映る半生蓮枯れて
こでまりの花を濁世に育ており
ギニョルの眼淫靡に誘う蟻地獄

細根 栗

故郷のふるさといろの青田風
お宝の壺は福耳新茶汲む
血液さらさら炎天のぐらぐら
相伝の薬缶頭と竹婦人
発電のパネル千枚大夕立

山口 彩子

大まかに細かに釘を打つ春昼
妖艶の刻あり壺に花あやめ
八月は誰か二階にいるような
石ころを踏み短日のふくらはぎ
身のうちのどこに触れても冬の川

田村 隆雄

大賀蓮見ている個性派と思う
何を語るか終戦の日の白い靴
流灯会岸を離れぬ姥がいる
坊主頭深く一札雲の峰
瓜の馬眠れぬ死者の声もらす

股野 久子

焦点は三代の笑み花の下
見守りの旗強く持ち朝桜
受難曲コラール高みへ春惜しむ
夏の旅靴に入る和英辞書
右ひだり何処尋ねて夏の蝶

松下總一郎

北総の巡る用水巴里祭
そこばくの余生を得たり葱坊主
杖立てて弥生の風に吹かれけり
つばくろに廁を供す道の駅
国境を持たぬ燕の飛翔力

どの蟬の洋服なのと子の言へり 岡崎 翠

「空蟬」と言わずして「空蟬」を詠んだ。その表現方法が特徴的な句である。「どの蟬の洋服なの」とは無垢の子供にしか思い浮かばない言葉であろう。それを巧みに句にまとめ上げた。子供の無邪気さ、純心さがほのぼのと伝わって来る作品である。

藤岡 尚子

千の眼と千の御手にも緑射す 宇佐見房司 121 6
皆一步海へ歩めり初日の出 東 國人 121 7
茅花囁む故郷離れるまで少年 阿部 良治 122 2
だんだんと子の離れゆく潮干狩 池田 和人 122 2
門をかけ月光を帰さない 加藤昌一郎 122 4
山からの風ある高さに柿熟る 片山 依子 123 4
ゆさゆさと村がふくらむ秋日和 國武 和子 123 4
負独楽の傷を少女が手でつつむ 倉岡 けい 123 5
故郷の墓は移さずきりたんぼ 澤田 寿一 123 6
新緑を依怙最良して伐りにけり 安田 時空 123 10
だんだんと子の離れゆく潮干狩 池田 和人
親子の潮干狩。夢中で掘り進むうちに、並んでいたはずの子が遠くに居る。目の端に捉えまた熱中する。

しかしふと気づく、この海岸での距離は子供の成長と共に離れ行く親子の距離である。思い至った途端、海の色、貝の色、波の音も今迄と違った感慨となる。

親子共に健全な安心の距離感は、即ち幸せな距離。「だんだんと」の措辞に父親の眼差しがよく出ていて、温かい気持にさせられる句だった。

袴田 菊子

雨の日は雨の詩を詠む沈丁花
初夢に亡夫来る髭の伸び放題
梨齧るなんと淋しい甘美かな
ひらひらと雪ひとくちの甘い菓子
菊人形とは面影か傷痕か
湖一つ春月二つのち永遠
火種申告せず椿の白樺派
伊勢海老いろいろあつて夫婦でいる
蔓たぐりあるひとりとはこんなもの
蜻蛉より遠いところを日暮とす

小林 俊子

東風きざす故知をわするな大津波
花の芽を落してゆける漢かな
涛が波となるまで音信不通の隴
針穴より見ている俗世亀鳴けり
風光るごめんなさいと言えたとき
姿見にからだほぐせば曼珠沙華
地の底も良夜なるべし樹木葬
誰からも遠い時間を木の実降る
名月や鳴り出しそうな父の尺八
サバンナ遠したてがみに桜しべ

吉岡 一二

鳥絞める妻ハイドンを聴く夫
官能のSLとゆく大花野
一陣の風に押されて卒業す
たんぼぼ野たどればきつとフータンへ
蝶生れる放浪癖がついたまま

三苦 知夫 120 4
森 美樹 120 4
山中 葛子 120 5
山崎 政江 121 6
渡辺 澄 121 6
市川 唯子 121 7
菊地 京子 122 3
岡田 淑子 122 3
片山 依子 123 4
塩野谷 仁 123 4

元橋 孝之 120 3
横須賀洋子 120 4
明石春潮子 121 7
石井紀美子 121 7
川上 典子 122 4
清水 伶 123 4
椎名 鳳人 123 4
塩野谷 仁 123 4
小張 直子 123 5
荒木 洋子 123 6

松澤 龍一 120 3
山中 葛子 120 5
東 國人 121 7
伊藤 典子 122 2
青木 一夫 122 2

原発の風くる村に芋を干す 川又 優 122 3
茶が咲いてむかしわれらに擦過傷 塩野谷 仁 123 4
陽炎に押されたる人転びけり 小林 実 123 4
満月の生みおとしたる隠岐の牛 重田 忠雄 123 6
春一番ローム崇りの赤い風 坂本 正夫 123 6

池田 博臣

原爆忌何することもない蛇口 門谷 杜人 120 3
黄落の街はルーベで覗くべし 森村 文子 120 3
奴隷日暮れのギリシャ見ておりぬ 横須賀洋子 120 4
黒い山と呼ばれて久し雪降れり 渡辺 澄 121 6
白藤の濃くなりすぎている真昼 愛甲 知子 121 6
ふと金魚いくさは外の海のこと 大見 充子 122 2
桃のかたにフクシマの桃洗ふ 川又 優 122 3
秋の夜の音遠ざけて刃物研ぐ 興津 恭子 122 3
蜻蛉より遠いところを日暮とす 塩野谷 仁 123 4
どうしてもひとり足らない花野かな 楠見 恵子 123 5
奴隷日暮れのギリシャ見ておりぬ 横須賀洋子

作者がギリシャ旅行をした際に機上からギリシャの美しい日暮れを眺めた時の景でしょうか。それとも、西洋文明発祥の地であるギリシャが、いまやEUのお荷物となつて悲しい現状を、日本を象徴する奴隷が人口減少の始まった我が国の将来の姿を重ね合わせて心配しているという風刺的な意味合いを込めているのでしょうか。いずれにせよ、純日本的な奴隷と純西欧的なギリシャの日暮れが上手く取り合わされた佳句。

小池美佐子

アナログの一人の世界冬仕度 森 ふみ子 120 4

寒波来る開けたるままの猫の門	柳本 ゆみ	120 4	葛の花もし聲出さば懼未知子	清水 伶	123 4	柳本 ゆみ	
深秋の毀れる砂を掻き集め	三好美穂子	120 5	蜻蛉より遠いところを日暮とす	塩野谷 仁	123 4	風向きを捉えて野火が走りだす	青木 一夫
恵方へとまわり道して若がえる	山崎 政江	121 6	少しずつ傷んで夜の冷房車	木下 昌子	123 5	竹皮を脱ぐいちまいは古代裂	菊地 京子
鬼やんま父の威厳に触れたよう	岩岡 方子	121 7	遠き日の野焼きの火災服で打つ	久保 筑峯	123 6	秋の夜の音遠ざけて刃物研ぐ	興津 恭子
一木を人体としてどう芽吹く	菊地 京子	122 3	明けの百合どきどき文学の端っこ	荒木 洋子	123 6	病む人に告ぐる桜の底力	岡田芙美子
竹皮を脱ぐいちまいは古代裂	菊地 京子	122 3	坂本千恵子			誰からも遠い時間を木の実降る	塩野谷 仁
曼珠沙華神と仏の影法師	小張 直子	123 5	曼珠沙華女に刃物火の匂い	小野 裕文	123 4	大の字も川の字も好き畳替	國分 三徳
明けの百合どきどき文学の端っこ	荒木 洋子	123 6	掛け違う胸のボタンや桜貝	泉 志眞子	123 4	画用紙の半分は満開秋桜	小池美佐子
地酒一本新米のにぎり飯	窪田 俊作	123 6	おみなめし母似と言われ母知らず	國武 和子	123 4	落日を掬いあげおり芒原	倉田たへ子
一木を人体としてどう芽吹く	菊地 京子		沙羅咲けり戦後を生きてはな子逝く	金澤 恵子	123 4	転た寝の間に枯木になつていた	窪田 俊作
			千年の桜浄土へ尾を垂らす	芝崎 梓	123 5	晩年や柿若葉にもする嫉妬	坂本 正夫
倉岡 けい			どうしてもひとり足らない花野かな	楠見 恵子	123 5	馬場 馬子	
海満ちてくる飲食の白障子	山崎 政江	121 6	初夢に初恋の人卒寿かな	佐久間眞城	123 5	五月雨や遺影の手前に父の居る	山菅 恵子
石橋を渡つた辺りから四月	渡邊 竹庵	121 6	大の字も川の字も好き畳替	國分 三徳	123 5	原点は男と女木の実降る	村上 澄子
九十年生きとし生きてきて朧	相原 一枝	121 7	待つ事も待たれる事も無き夜長	斉藤すず子	123 6	裸木のむかう裸木ピカソ展	上野 紫泉
肘鉄へ食らいつきたる大西日	井上きよ美	122 2	叩かれて打たれて野火の太りけり	重田 忠雄	123 6	行くところまで行くつもり花筏	相原 一枝
独活の白刻む誤解のないように	青木 一夫	122 2				ふらこを漕いで宇宙の境界線	岩岡 方子
伊勢海老やいろいろあつて夫婦でいる	岡田 淑子	122 3	杉山真佐子			稜線の向こうが見たい蕎麦の花	興津 恭子
蛸蛸に足ラストダンスの靴がない	加倉井允子	123 4	うとうとと狢犬はらはらと桜	増田 元子	120 5	唐辛子干され脇役貫きぬ	岡田芙美子
茶が咲いてむかしわれらに擦過傷	塩野谷 仁	123 4	空蟬の声聴く耳のない埴輪	水沼 幸子	120 5	わが死後はゴミとなる本鵲の贅	小野 裕文
私の噴水しかるべき円を成す	荒木 洋子	123 6	生き甲斐の水にありけり水中花	相原 一枝	121 7	寒鯉も口あく娑婆にひとりかな	尾形ゆきお
原爆忌しかな木からしゃべりだす	重田 忠雄	123 6	湖一つ春月二つのち永遠	市川 唯子	121 7	血は未だ大地に流る沖縄忌	久保 筑峯
田口満代子			臨界はくちびる辺り立泳ぎ	大坂 吉也	122 3		
菊人形とは面影か傷痕か	渡辺 澄	121 6	竹皮を脱ぐいちまいは古代裂	菊地 京子	122 3	田沼美智子	
夕景は胸中に似て花水木	石井紀美子	121 7	午後の卓とことん白シャツと猫	加納ひでこ	122 3	ビードロのうすぐらがりの寒さかな	山崎 聰
ふらこは鳴子百合よりさびしいか	植原 安治	122 2	毒草も少しアロマへ四月尽	太田まさ子	122 4	官能のSLとゆく大花野	山中 葛子
竹皮を脱ぐいちまいは古代裂	菊地 京子	122 3	硝子切る静けさにあり蟻地獄	清水 伶	123 4	秋深し全ていいえと問診票	秋谷 菊野
もつれ合う蝶南溟に眠る考	小野富美子	122 3	どうしてもひとり足らない花野かな	楠見 恵子	123 5	知恵の輪のはずれない日の蜃気楼	東 國人

たんぼ野たればきつとブータンへ
五月のドクター一切除患部のボカン
風船のかたちで赤ちゃん立ち上がる
唐辛子干され脇役貫きぬ
曼珠沙華女に刃物火の匂い
原爆忌しずかな木からしゃべりだす
曼珠沙華女に刃物火の匂い
小野 裕文 123 4
重田 忠雄 123 6

副食の魚に刃物を入れた。魚は香ばしく焼けた。刃物も火も命を支える物。キッチンから毎年曼珠沙華を見る。この花を家に持ち帰り「家が火事になる」と叱った母を思い出す。曼珠沙華の別名が数百あるらしい。生活に密着する花なのだ。日々の生活に欠かせない刃物と火。女の心が裏返った時、凶器となり、命を失う物にもなり得る。そのことを此の句に意識した。平明な表現の句意が、心の奥底の、どろつとしたものに触れた。

原島 典子

待合室の角を支えるボインセチア
知恵の輪のはずれない日の蜃気楼
角砂糖の素直な分子春の雨
薔薇のひらき切るまで親である
一木を人体としてどう芽吹く
苦瓜のずきんずきんと明日かな
紅梅より白梅まで視野検査
苺食うずばずびずぶと人を食う
尊厳死白桃の種が大きい
三本のチューリップの差方程式
角砂糖の素直な分子春の雨
森須 蘭 121 6
東 國人 121 7
岩岡 方子 121 7
伊藤 希眸 122 2
菊地 京子 122 3
小川トシ子 122 3
岡田 春人 122 4
楠井 収 123 4
芝崎 梓 123 5
小池美佐子 123 5
岩岡 方子

春雨の中一時お茶でもしているのでしょう。
角砂糖はすつととけこの季節の雨もしとすと
身体にしみこんでいくもの。もの思いにでもふ
けているのでしょうか。作者もきつと素直な
のでしょう。なにごとにもとけこんで世の中上
手に生きていけることでしょうか。私も共鳴で
きる一句です。

佐藤 映二

硝子切る静けさにあり蟻地獄
地の底も良夜なるべし樹木葬
茶が咲いてむかしわれらに擦過傷
陽炎に押されたる人転びけり
やれるだけやるとキャベツの雪払ふ
討ち入りの日の欠席を託ける
胸に潮満つるときあり忍冬咲く
満月の生みおとしたる隠岐の牛
地下水の丸い手ざわり盆用意
埋もれて鰐が生きる夏の砂
地の底も良夜なるべし樹木葬
藤原三代の遺体の安置された金色堂で有名な
中尊寺。その広大な寺領の一つに骨寺村がある。
俳友の一人がその一角に設けられた樹木葬用墓
地の一区画を使用できる契約をしたという。毛
越寺から矢櫃温泉へと向う道沿いの樹林帯で、
いかにも土に還るにふさわしいと思った。
この句は、樹木葬を無事済ませた帰路、折か
らの中秋の名月を仰ぎながら、故人もこの良夜
に安らかに眠ってくれんことを祈っているのだ
ある。胸に響く句である。

山中 頼子

梨齧るなんと淋しい甘美かな
空蟬の声聴く耳のない埴輪
針穴より見ている俗世亀鳴けり
寂聴も兜太も我も叫ぶ夏
受付の金魚に懷読まれたり
一木を人体としてどう芽吹く
春月や影絵は影を脱いで寝る
蛭蛸に足ラストダンスの靴がない
誰からも遠い時間を木の実降る
冷房という水槽に居てふたり
蛭蛸に足ラストダンスの靴がない
加倉井允子 123 5

この一句を楽しく読ませていただきました。
おたまじゃくしは、成長するにつれ、手足が
でることは当然のことだと思えます。
しかし、ラストダンスに履く靴が欲しいと想
像して一句にしたところがおもしろいと思いま
した。

高野 礼子

半球を瓶詰にして冬夕焼
枯蔓の空引つ張れば漠と母
やはらかな邪鬼に捕まる暮の春
藍染の壺にたゆたふ春の夢
世に遠く拗ねて樹上の蝸牛
忍冬ほえんでただ側にいる
惜別やほたる袋の深さほど
茶が咲いてむかしわれらに擦過傷
初秋のひとつじ受胎告知かな
一滴に無限の真昼しゃぼん玉
吉岡 一三 120 5
村田 珠子 120 5
上野 紫泉 121 6
井上けい子 121 7
植原 安治 122 2
伊藤 典子 122 2
小野 功 122 4
塩野谷 仁 123 4
坂間 恒子 123 4
黒澤 雅代 123 5

津田沼研究句会報告

(於…津田沼一丁目町会会館)

第三〇〇回 (平成二十九年五月九日)

司会 佐藤 晏行

藤棚の下に郵便配達夫

楠見 恵子

春雷やタツのおとし子浅草に

村上 澄子

母の日や我には長き反抗期

股野 久子

あの涙をもうみつけれないれんげ野

松崎あきら

暗峠たけのこ流しだったのか

小林 実

るるるる満天星の花鳴っている

山中 葛子

藤あられは 雨空の脚

竹中 華那

おおむらさき大爆笑の余韻かな

池田 博臣

あねさんの灰汁を抜きたる夏の初め

林 阿愚林

新緑や理科室好きの男の子

なかもと淑子

つちふるや四丁目の交差点

イザベル真央

槍刀兜も知らず端午の節句

金子 未完

菜の花の沖忽然と護衛艦

徳吉洋二郎

少年のピアニ力通る五月晴れ

岡田 淑子

青葉騒前世に聴く敦盛の笛

吉野 精

旅券なし蜥蜴を追ふや警備隊

大塚 弘毅

屋過ぎの薔薇園にゐて薔薇を見ず

檜垣 梧樓

鉛筆一本かこみ動かぬ花筏

佐藤 晏行

静けさや少女らの青春の雨

白木 暢子

第三〇一回 (平成二十九年六月十三日)

司会 松崎あきら

水無月の膝から下は分ならずや

横須賀洋子

姥捨ての棚田の水の疾さかな

イザベル真央

凜々しくて毀れやすき人缶ビール

池田 博臣

生きものの匂いを連れて夕立かな

なかもと淑子

夕焼をはがいじめする純老女

山中 葛子

嬸とは女の続き更衣

徳吉洋二郎

ライオンの腕に古傷夕焼ける

岡田 淑子

口開けて目葉させと早梅雨

村上 澄子

横浜の港に着いたさくらんぼ

吉野 精

通し鴨住民税を徴収します

金子 未完

おいてけ堀に下駄がゆらゆら夏に入る

佐藤 晏行

夏服や中学生の暗記力

股野 久子

木漏れ日に蜩草また蜩草

楠見 恵子

平和てふ膏薬貼つて昼寝して

松崎あきら

金真桑ミサイル落ちるは太平洋

大塚 弘毅

赤ちゃんホストの少年凜と走り梅雨

檜垣 梧樓

白猫は梅雨寒の月の下

白木 暢子

四大順ならざれば芋植えている

小林 実

第三〇二回 (平成二十九年七月十一日)

司会 横須賀洋子

水打って水飲んでやと人間

横須賀洋子

蛸は足人は頭脳を授かりて

金子 未完

白桃やじんじん老いる爪を持ち

岡田 淑子

白砂青松いつし纏わぬ蛇身かな

徳吉洋二郎

わが腕に朝の蛍が纏り付く

小林 実

黙々と行く炎天の影法師

深山きんぎょ

ネクタイに餃子の辣油梅雨の明

前島きんや

髪洗ふパズルの解けぬまま深夜

股野 久子

Sという路上のかたち小蛇死す

山中 葛子

猛暑日や俳句はロッケンロールだぜ

松崎あきら

めだか三匹生きるのも息苦し

白木 暢子

駒形や翁ひとりのどぜう鍋

村上 澄子

暗渠ひびく蜥蜴のめをとこらしき

佐藤 晏行

蔓薔薇にかすかな罪の匂いかな

楠見 恵子

ベビーカーのインドの子供片蔭へ

イザベル真央

端居して死にぎわ談義熱くなり

なかもと淑子

植木屋の粋な兄さん夏の蝶

吉野 精

瘡蓋をまた剥がしてる夜涼かな

池田 博臣

旅券なき黒蟻今やテロ集団

大塚 弘毅

サングラス睡眠負債目じゃあない

檜垣 梧樓

青葉研究句会報告

(於…千葉市民会館・第五会議室)

第七十一回 (平成二十九年五月二十五日)

司会 加藤 法子

夕焼より引抜く一冊普陀洛記

加藤 法子

純白の牡丹の刺青なら許す

長濱 聰子

笙簞簞こわ一瞬の青野原

小林 実

白日にさらす総身蛇として

細根 栗

晝寝して白の浴衣の父と会ふ

棗 梢伊

白日に内臓晒せと共謀罪

並木 邑人

少女変心あじさいの白きころ

徳吉洋二郎

白牡丹ひとひら風の一筆箋

石井紀美子

生き方の次は死に方えごの花

鈴木まんぼう

花粉まみれの蜂は尻より現世へ

越野 雄治

角隠しの嫁御は狐花菖蒲

山崎 幸子

白を切る言い訳しきり更衣

細野 一敏

子供の日恒星惑星無限なり

吉野 精

日本海聴きながら虎杖は斬られ

竹中 華那

九条苦情変換ミスは出来ぬ夏

矢野 忠男

平和がおぼれています蟻地獄

馬淵 津枝

濾過されたクレソンの沢聖老女

松崎あきら

第七十二回 (平成二十九年六月二十三日)

司会 並木 邑人

朴の花吾は鷹作かも知れぬ

三須 民恵

缶切りを忘れ万緑に叱られる
空缶のバベルの塔を熱帯夜
缶蹴りや夏木に隠る奇魂
海深く空落ちて梅雨始まりぬ
血脈の滾る往還里祭
血圧測る百日紅の至近距離
嫉妬心の缶詰あげる泰山木
空缶を蹴り加齢には負けられぬ
血を抜く女抜かれる男早空
熊野なる木霊をこめて滝一本
空き缶のカンラカラカラ夏の空
不死男の忌いま缶の蓋バカリ開き
上総野の梅雨はやさしい女です
一葉の頭痛肩こり棕櫚の花
海霧の船繋ぐ製罐工場沖仲士
鳩笛の調べ千古の杜涼し

細野 一敏
徳吉洋二郎
越野 雄治
馬淵 津枝
石井紀美子
長濱 聡子
並木 邑人
山崎 幸子
小林 実
加藤 法子
矢野 忠男
棗 椿伊
吉野 精
鈴木まんぼう
竹中 華那
細根 栞

●第七十三回（平成二十九年七月二十七日）

司会 細根 栞

蜥蜴の尾いつかこの家も負の遺産
血液さらさら炎天のぐらぐら
耳打ちのおおきすぎます水中花
終戦日指一本で弾くピアノ
キララなる雫蛇笏の巴旦杏
肌脱や親より大事なものはある
おおかたの昭和は路地裏心太
明日やあり古着片付け不死男の忌
齢人耳に鍵かけ夕端居
織姫をあきらめ婚活始めたる
流木に宿るたましい道おしえ
人間と目のあわぬよう河馬の耳

長濱 聡子
細根 栞
加藤 法子
馬淵 津枝
細野 一敏
竹中 華那
鈴木まんぼう
棗 椿伊
石井紀美子
吉野 精
徳吉洋二郎
小林 実

柏研究句会報告

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第六十回（平成二十九年五月十三日）

司会 佐藤 鈴子

脳味噌のずっしり詰まる葱坊主
花卯ツ木胸透けるまで泣いてみる
兄逝きて完璧となる春の宵
寡黙な私へ新緑が語り出す
夏の大河渡れば二ツ分に逢えるかも
青時雨吾が輪郭の静けさよ
五月闇同じ言の葉じつと聴く
須弥山のそれより天上雷鳥鳴く
財布落ちるこの世にあつと声を出し
望郷の海夕焼けのトランベツト
憲法の話終わらぬ憲法日

野口 京子
下村 洋子
高橋 宗史
木之下みゆき
井上けい子
栃木 きよ
佐藤 鈴子
長井 寛
松澤 龍一
小林 俊子
岡田 春人

●第六十一回（平成二十九年六月十日）

司会 栃木 きよ

遙かなるきのうの記憶夏薊
点滴の間隔ゆるく梅雨に入る
隕石が降るぞ疾走のヒキガエル
賛成も反対も不安沖縄忌
言紡ぐ面子おはじき夏の雲
跳び箱の皮の匂いや通り雨

長井 寛
野口 京子
松澤 龍一
岡田 春人
小林 俊子
下村 洋子

少年の怪異の脳や新樹光
ひきかへる聖人のやうに楚と構へ
ステッキの素敵で詩的初夏詩人
誓ひなどせぬがよろしと大夕立
おだてられその気になつて梅雨寒し
長電話一日有耶無耶羽脱け鳥

佐藤 鈴子
伊藤 希眸
高橋 宗史
井上けい子
小張 直子
栃木 きよ

●第六十二回（平成二十九年七月八日）

司会 栃木 きよ

ブーメランを追う大万緑をつかむ
雪溪や野を傾けて岩木山
たそがれて向日葵西を見ていたり
より近く夏月と居て孤独なり
麦秋に囲まれ屋敷炎上せん
恋もするスキップもする夏鴉
夕べには想ひをたたむ紅芙蓉
麦を打つ死ぬ順番を決めて打つ
遺品とて豹柄模様更衣
海鳴りに押しもどさるる寒い夏

小林 俊子
野口 京子
長井 寛
下村 洋子
高橋 宗史
岡田 春人
井上けい子
松澤 龍一
佐藤 鈴子
栃木 きよ

◆秋の吟行会のお知らせ◆

日時 平成二十九年十月二十五日（水）
場所 流山市一茶双樹記念館
句会場 流山市生涯学習センター

*詳しくは折り込みチラシをご覧ください。
皆様のご参加を楽しみにしています。

企画部一同

図書紹介

■大畑等遺句集『普陀洛記』

平成二十九年二月刊 私家版

黄昏は抹香鯨に逢いに行く
梅干して普陀洛渡海忘れたり
文鳥を手に載せ我ら何処へ行くのか

―一句鑑賞 秋尾 敏―

流木の焚火のなかに国生まる 大畑 等
この国の祖先は、おそらくは皆、どこからか流れ着いたのである。土着の〈国つ神〉でさえ、流浪の過去を持っていたに違いない。むろん、その「国」と呼びうる共同体が形成される以前の話である。

浜に流れ着いた人々は身を寄せ合い、先にその地に着いた人々と間合いを計りながら小屋を建て、食を漁りはじめる。夜になれば火を焚き、明日の糧について語りあった。

ある日そこに、先住の人々が訪ねてくる。警戒心に満ちた目を笑顔で隠しながら、彼らは身振り手振りで、どうやって火を起こしたのかと尋ねたのであった。

流れ着いた人々は、先住の人々を受け入れ、火を起こす技術を見せ、どこで魚が捕れるかを尋ねた。そのとき、流木を燃やす火のなかに、国家と呼びうるものの核が形成された。

この句の作者、大畑等は和歌山県新宮市の生まれ。熊野の風土性を一身に封じ込め、東京で建築学を学び、千葉県現代俳句協会会長を務めた。現代俳句協会の幹事も務め、IT部長としてこのホームページを充実させたの

も大畑であった。

大畑等は、手垢の付いた日常の言語表現が、何を伝える力も無いことを知り抜いた男であった。空虚な都会の言葉に終生抗ったと言ってもよい。彼は、風土からわき上がる血の温みを持った言葉だけを信じ、俳壇から、命を伝える力を持たない類型化された表現を駆逐するべく戦い続け、平成二十八年一月、心不全によって六十代半ばでこの世を去った。記憶されるべき男と思う。

※付記 大畑等遺句集『普陀洛記』の跋文を宇多喜代子氏が書かれている。
一読をお勧めする。

(現代俳句協会ホームページより転載)

■『俳句の底力』 秋尾 敏

―下総俳壇に見る俳句の実相―

平成二十九年六月刊 東京四季出版

一茶から「軸」創刊に至る下総俳壇の流れを、資料に添って丁寧な記述。俳句が持っている人々を社会に結びつけ、自己表現に導く力を解き明かしている。

明治期の旧派や秋声会の俳人が、自由民権運動の中で近代的自我を育んでいったという指摘は初めてのものではあろう。また戦時中に文学報国会に守られながら表現の自由を貫こうとした「南柯」主宰、渡辺志豊の生き方も興味深い。定説や先入観にとらわれず、俳句を詠むことによって、社会の中に自分の居場所を作っていた「文学する」人たちの情熱が愛おしい。

ひろば

■第一四六回野田俳句連盟春季大会

平成二十九年四月二十三日(日)に野田市興風会館に於いて第一四六回野田俳句連盟春季大会が開かれた。出席者六十六名、欠席投句者二十五名。席題は「浅蜷」。

(高橋宗史記)

来賓・選者・会長詠(順不同)

伊藤希眸先生 臍の緒は一粒の石しんきろう
北川昭久先生 出来不出来聞いて掻きたる浅蜷かな
藤岡貞夫先生 フランスを仏と書いて万愚節
実籾 繁先生 風評に結界はなし桜鯛
秋尾 敏会長 挑発の指に過敏な春の雪

入賞者(三句合点) 代表句 ○内は順位

市長賞 折り合ひをつけては離れ花筏 鈴木 岑夫
議長賞 鬱少しなり春泥の半濁き 金田めぐみ
教育長賞 椿落つくつ落ちたら許される 青木 一夫
連盟賞 野に遊ぶもう手をつなぐこともなく 吉田 叔子
⑤ 股ぐらにスカイツリーを浅蜷取る 田村 隆雄
⑥ 夜の浅蜷桶に太平洋を吐く 松澤 龍一
⑦ 翁と曾良旅立つ前の浅蜷飯 藤岡 貞夫
⑧ 花散らぬうちに仏に逢いに行く 野口 京子
⑨ 地球儀をきれいに拭いて卒業す 佐々木 幸子
⑩ 星になつて来いよ笛煮えたから 椎名 鳳人
⑪ 虚と実を篩にかけて春惜しむ 栃木 きよ
⑫ 八十八夜近しかさこそ背は動き 伊藤 希眸
⑬ 浅蜷掘るサンバ開こえるところまで 渡辺 孝夫
⑭ 衣替へ風も着こなす野良育ち 千葉 智司
⑮ 国籍をかくし浅蜷のまかれおり 星野 一恵

《会員・会友の近況》

- ・喜寿の年となりました。物欲は下降、山歩きと旅に前途洋々の感しきりです。(沼山美津江)
- ・有料老人ホームの自立棟に入居して一年余、夫は透析二十五年、一日おきに病院通い、私は俳句と詩吟に生き甲斐を感じる毎日。平成二十一年船橋市小室公園に第一句碑建立。二十四年に、出身地の茨城県大洗の菩提寺に第二句碑を建立。(中山 皓雪)
- ・時々腰痛が起こります。しばらくすると直ります。でも、腰痛にはヨーツイです。(松澤 龍二)
- ・地元木更津市畑沢公民館俳句サークルが、今夏で二十周年を迎え、細やかな作品集編集纂中です。何処も同じで、会員の高齢化が悩みの種です。(三苦 知夫)
- ・俳句に出合つて六年、カルチャーセンターのジャズボーカルクラスに入つて四年、全く違う二つの趣味を楽しんでいるつもりでしたが共通点がありました。言葉をリズムに乗せる大切さ、そして想像力！(松本 千花)
- ・略四十年前自分の辞世の俳句をひとつ作ることが出来ればとの思いで入門し、日々辞世と心得て俳句に向きあっている。ライフプランとして出来るだけ多く旅行をしようと思っている。まだ海外には十カ国しか行っていないが元気でいけるのは年齢的にあと数年程度であり体調管理をしながら頑張つてみたい。(元橋 孝之)
- ・青葉句会に参加させて頂き、七月で満六年が過ぎました。個性豊かな仲間達とともに楽しく俳句を学んでおります。そして俳句の奥深さに悪戦苦闘の日々です。(細野 一敏)
- ・太極拳やネット基などを楽しんでいます。(安田 時空)
- ・俳句を始めて十年。俳句の基本を学びました。これからは、自分の個性を表現すること

- ・とに重点を置くつもりです。(前島きんや)
- ・このところの暑さに少々バテぎみです。俳句の泉も涸れかけて…。(深山きんぎょ)
- ・町会の老人会に仲間入りする身となつてしまいましたが。そろそろ終い仕度と思うのですがいざとなると何からどのように手をつけていいのやら。いささか焦りを感じている昨今です。(保坂 末子)
- ・昨年四月起床するや否や足裏が痛く、部屋の中を杖をついて歩いていました。整形外科で二ヶ月ほど点滴を続けたあと、内科に回され、狭心症と判明。九月にカテーテルの手術をし、痛みもなく歩けるようになった。即ち、人の足裏は第二の心臓であることを知らされた。(柳沢 純)
- ・大きな壁小さな壁にうちもさつちもいかなく困りはてて居ります。(矢野 忠男)
- ・月一回の「連句会」を、二十年近く続け、やっと楽しさを覚えるようになった。前句に関わりながら発展的に繋がる句をと言われるが、仲々難しくじたばたする。最もじたばたするのは、恋の句だ。これに当たると、長考、黙考となる。(藤岡 尚子)
- ・丁寧な暮らしを心掛け、日々不変に過ごしております。(松崎あきら)
- ・短歌の機関誌で俳句を発表しているのですが、なぜか俳句の友人も増えていきます。もう少しこの辺りを歩いてみようかと思っております。(宮本美津江)
- ・肩の手術のあとリハビリの効なく筋肉が付かず苦慮しています。文字を書くのも困難で何かと不便です。句会に出席出来ずいらしています。(藤田 守啓)
- ・年令と共に失せてゆく詩心を如何ともしがたく苦吟ばかりの日々です。千葉現俳の吟行会など参加させていただいたことを懐かしんでおります。(山口 彩子)

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 片山依子、河辺智文
 - 入会 (会員) 阿部さくら、青木 暉
 - 退会 (会員) 多胡たかし
 - 移転 (会員) 八木邦夫
 - 移転 (会員) 鈴木一行 (花見川区へ地区内移転)
 - 移転 (会員) 福島文子 (柏市旭町へ地区内移転)
- ◇ 訂正 ◇
一二五号を左記の通り訂正お詫びいたします。
表紙右上の発行日
(正) 2017.6.1 (誤) 2016.6.1

□ 事務局・編集部だより □

- 巻頭エッセイは今年戦後七十二年、少なくなりました戦争体験者のひとり吉野精さんに特別寄稿を頂きました。

現代俳句千葉 第二二六号

平成二十九年九月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 秋尾 敏

現代俳句千葉編集部

〒261-0004 千葉市美浜区高洲

三十五-六-一六〇二

徳吉洋二郎

千葉県現代俳句協会事務局

〒278-0043 野田市清水五

二七-一〇

高橋 宗史

TEL・FAX 〇四-七-二二五-三三八二